論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　佐藤桐子

佐藤桐子氏の博士論文 The Development from Case-Forms to Prepositional Constructions in Old English Prose（古英語散文における格形から前置詞構文への発達）は、「総合的言語から分析的言語へ」という英語史における一大言語変化について、古英語期における格形（総合的表現）から前置詞構文（分析的表現）への移行に焦点を当てて論述したものである。資料として用いられた古英語テクストは、前期古英語の 3 つの散文作品（The Parker Chronicle, Boethius, Bede）および後期古英語の 3 つの散文作品（Ælfric's Catholic Homilies の第 1 部, Ælfric's Lives of Saints, Wulfstan's Homilies）である。

第 1 章から第 6 章では、上記 6 つのテクストそれぞれにおける格形・前置詞構文の使用頻度について「手段・様態」、「付随」、「時点」、「期間」、「起源」、「特定化」、「独立与格」などの機能別に綿密に考察が加えられ、以下のような結論が得られた。まず歴史的変化については、前置詞構文の比率は、前期古英語のテクストでは平均して 4 割強であるが、後期古英語では、8 割近くに上昇し、「古英語期において格形と前置詞構文の比率については大きな変化がなかった」とする先行研究の結論を否定するものとなった。また、機能別に見ると、「手段・様態」、「付随」、「時点」、「期間」、「起源」では、いずれも後期古英語では、前置詞構文への傾斜を強めている一方、「特定化」と「独立与格」では、逆に格形が増加、または格形・前置詞構文の両者に増加の傾向が見られる。従って、全体としては、前置詞が増加する傾向にあるが、機能によって違いが見られる。また、格形・前置詞の選択において、意味の違いや微妙なニュアンスの違いが関わることもあり、例えば、「手段・様態」では、「様態」には格形が使われる傾向があるが、「手段」の意味では前置詞が好まれること、また、「期間」では、長い期間であることを強調する場合に特に前置詞を使う傾向が認められる。

古英語期では、格形から前置詞構文への移行という一般的な変化の傾向が見られる一方、同時代のテクスト間でも、格形・前置詞構文の比率に大きな相違があることを、佐藤氏は明らかにしている。テクスト間での統計上の違いは、個々のテクストにみられる固有の文体的特徴との関連で吟味される。例えば、前期古英語では、Bede は Boethius より格形の比率が高いが、これは、Bede におけるラテン語原典の強い影響を反映しているとする。後期古英語でも、格形の頻度は、Ælfric's Catholic Homilies、Ælfric's Lives of Saints、Wulfstan's Homilies の順で高くなるが、これは、リズミカルな文体との関連で解釈される。最後の第 7 章では、結論が述べられ、さらにより巨視的な視点から、古英語散文の文体的発達について議論される。

以上が本論文の概要であるが、古英語における格形と前置詞構文の頻度と分布の推移を、ただ事実を指摘するだけでなく、その事実を「歴史的変化」と「文体的差異」という二つの要因を軸と

して綿密にかつ丁寧に議論している点がいずれの審査委員によっても高く評価された。「文体的差異」の例としてあげられた、後期古英語の Ælfric と Wulfstan の説教散文の間に見られる格形・前置詞構文の用法の違いについても、将来への発展性を含んだ問題であるとの意見があった。また、従来あまり深く論じられることのなかった、機能ごとの格形・前置詞の分布の調査に関しても好意的な評価を受けた。

一方で、本論文には以下のような問題点も指摘された。まず、本研究における佐藤氏の主たる関心が、「歴史的変化」にあるのか、それとも個々のテクストの共時的な「文体的差異」にあるのか、ところどころ揺らぎが見られるという論評があった。また、本論文のキーワードのひとつである「文体」についても、その定義がやや曖昧であり、文体という概念自体への考察も不十分であるという批評もあった。さらに、佐藤氏が調査対象にした 6 つの古英語散文の選び方にも問題点が指摘された。

こうした欠点は見られるものの、佐藤氏の論文は、古英語期の格形と前置詞構文に関するこれまでにない詳細な研究であり、将来へのさまざまな発展の可能性を含んでおり、全体として学術的な価値が高く、この分野における優れた研究成果として十分に評価に値するものである。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。